

|   |           |                     |          |
|---|-----------|---------------------|----------|
| <b>野生獣の冬期の餌場価値を低減する畦畔管理技術</b>   |           |                     |          |
| 【要約】冬期の畦畔・法面の緑草は、10月下旬以降の草刈りやチガヤ、ヒガンバナ植栽により発生が抑制される。また、ヒガンバナ植栽は、イノシシの掘り返しによる畦畔・法面の崩壊を防ぐ効果が高い。 |           |                     |          |
| 農業技術振興センター・栽培研究部・作物・加工担当  |           | 【実施期間】平成19年度～平成21年度 |          |
| 【部会】農産  | 【分野】多面的機能 | 【予算区分】国庫            | 【成果分類】指導 |

### 【背景・ねらい】

全国的に野生獣による農作物被害が跡を絶たない状況にある。その一因として、冬期の畦畔・法面に繁茂する緑草が野生獣のエサとなり農地依存度を高めていることが指摘されている。

そこで、冬期の畦畔・法面の緑草を抑制する営農管理技術を明らかにする。

### 【成果の内容・特徴】

1月の草量は10月下旬以後に畦畔・法面の雑草を刈ることで約20%に低下でき、冬場の餌場価値を低減できる(図1)。

チガヤは法面に栽植後4～6月に3回刈ることで優位となり、さらにチガヤが冬枯れするため冬期の草量は減少する(図2)。

ヒガンバナは法面を優占させると、冬期に約90%の被覆度に達し、イノシシによる掘り返しが認められない(図3、4)。

### 【成果の活用面・留意点】

ヒガンバナの球根は、植物神経毒のアルカロイドを有する。

ヒガンバナを早期に繁茂させるには、稲作期間中に通常行う草刈り後、開花前(おおよそ9月下旬)に花茎を切除するなどのきめ細かな管理を行う。

農地の餌場価値を低減するためには、ヒコバエや放棄果樹などのエサ資源を無くす対策とあわせて実施する必要がある。

## [ 具体的データ ]

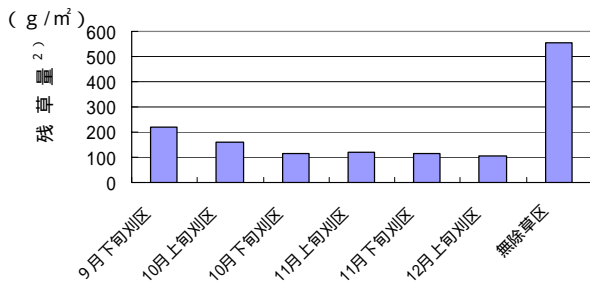


図1 畦畔の草刈り期別残草量

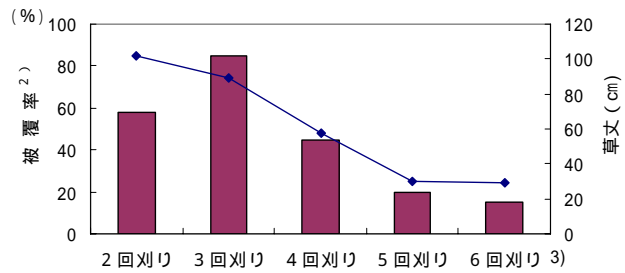


図2 チガヤの刈り払い回数別被覆度および草丈

注3) 刈り払い年: 2008年9~12月、調査日: 2009年1月28日。

注4) 各区とも1 m<sup>2</sup> × 2反復を刈り払った乾物重の平均。

注1) 調査地: 安土町大中の場内法面。調査日: 2009年11月24日。

注2) 2 × 1.5m × 2反復で、目視による達観値の平均。

注3) 2回: 4/28・5/27、3回: 4/28・5/27・6/25、4回: 4/28・5/27・  
/25・7/27、5回: 4/28・5/27・6/25・7/27・8/26、6回: 4/28・5  
/27・6/25・7/27・8/26・10/12。

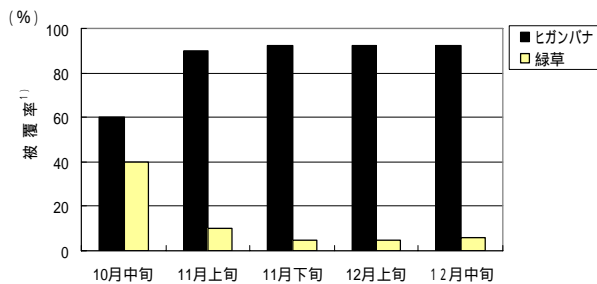


図3 ヒガンバナ優占法面でのヒガンバナと緑草の被覆率

注1) 多賀町敏満寺の法面において1 m<sup>2</sup> × 3反復の目視による達観値の平均。

注2) 9月下旬に開花し、10月上旬から出葉。

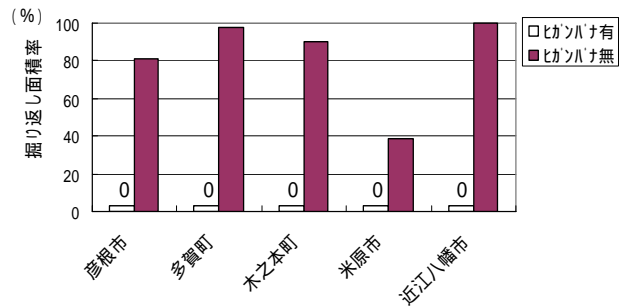


図4 ヒガンバナの有無とイノシシによる畦畔の掘り返し面積率

注5) 調査日: 2009年12月17日。

注2) ヒガンバナが密生し、イノシシの出没が明確な畦畔で調査。

## [ その他 ]

### ・ 研究課題名

大課題名: 農林水産業の持つ多面的機能の評価および増進に関する研究

中課題名: 心やすらぐ田園空間の創造と多面的機能の発揮に関する研究開発

小課題名: 野生獣の農作物被害防止栽培管理技術の開発と総合防除システムの検証

- ・ 研究担当者名: 森茂之 (H19~H20)、山中成元 (H19~H21)、高畑正人 (H19~H20)、河村久紀 (H21)

### ・ その他特記事項:

平成21年度近畿中国四国農研機構シンポジウム(岡山市)で発表。

21世紀の日本を考える(農文協、2009)。